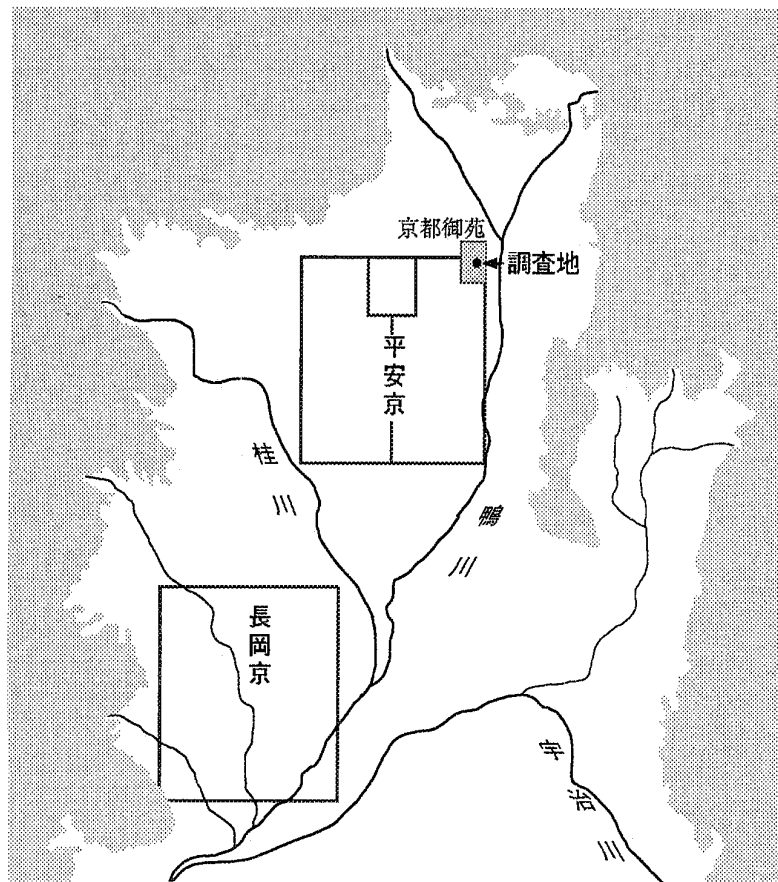


# 平安京左京北辺四坊

## —京都御所東方公家屋敷群跡—

発掘調査現地説明会資料



1998年6月13日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

## 平安京左京北辺四坊一京都御所東方公家屋敷群跡—発掘調査現地説明会資料

場 所	京都市上京区京都御苑 3
期 間	1998年 3 月末～継続中
調査面積	約900m <sup>2</sup>
調査主体	(財)京都市埋蔵文化財研究所

### 調査の経過

本調査は和風迎賓施設（仮称）建設予定地の発掘調査である。建設予定地内においては、昨年5月に試掘調査を実施し、堆積層序や遺構の確認を行なった。今回の調査は建設予定地の北西部の発掘調査であり、樹木の移植に伴う立会調査を、昨年12月より実施している。今調査区は、本年3月末より開始したものであるが、江戸時代の遺構が良好に保存されていたため、ここに公開する運びとなった。

### 調査地の歴史的環境

建設予定地は平安京の東北隅、左京北辺四坊の五町・六町・七町・八町にあたり（図2）、七町には藤原良房の邸宅「染殿」や清和上皇の後院「清和院」が推定されている。第1調査区は、五町の東端から富小路をはさんで八町の西端にあたる。八町には藤原褒子の邸宅「京極殿」や藤原顕忠邸があったとされる。

現在の京都御所は鎌倉時代の里内裏「土御門東洞院内裏」がもととなっている。調査地はその東にあたるため、関連する施設が置かれていた可能性も考えられる。

桃山時代になって、この場所には公家衆の屋敷街が形成された。屋敷街は幾多の火災にあいながらも江戸時代の全期間にわたり存続する。しかし、明治2年（1869）の東京遷都で公家衆も東京に移ると、空き地となり荒廃した。その後、明治10年（1878）から数年かけて整備され現在のような景観となった。昭和24年（1949）からは国民公園京都御苑として開放され、現在に至る。

### 検出した遺構

平安時代では、富小路の路面と西側溝を確認しているが、未調査である。南端における西側溝の中心位置は、Y=-21,160m（図1参照）である。

室町時代では、柱穴や土塋を確認しており、町家の存在が推定できるが未調査である。

江戸時代では、礎石建物・柱穴・柱列・井戸・溝・石組遺構・通路・ごみ捨て土塋・瓦溜の土塋・集石土塋などを検出した（図1）。

東西方向の溝7は、南岸に石垣をもつ。その南側は部分的に小礫が敷かれ、通路であったと考えられる（通路D）。通路Dの上に造られた池57は漆喰を固めたもので、北側に2石を配置する。北端の溝72も北岸に小規模な石垣をもつ。この南にある通路Cは小礫

を敷き固めた路面をもち、南には小規模な溝213が側溝として付属する。通路と側溝は井戸11の南で途切れる。通路Cをはさんで北側には建物A、南側には建物Bがある。ともに礎石建物で、東の柱筋がそろそろ。建物Aは東西長8.5m、建物Bは東西長24.5mとして復元した。建物Bの中央部は赤く焼けており、カマドの施設があったとみられる。

建物Bの南東には集石土壌が分布する。集石157・165は東西方向に並存し、集石205・215は土壌内に石を詰める。井戸は6基検出した。井戸107は花崗岩の切石が残るが、他は石材がすべて抜かれている。石組6は井戸状を呈するが、深さは1mしかない。瓦溜は火災時の焼瓦を廃棄した土壌で、北東部に掘られている。調査区の南半には聚楽土じゅらくつちと通称される土層が分布するため、広い範囲にわたって土取りされている。土取穴の深さは現地表から4mに達する。

#### 出土した遺物

井戸・土壌・土取穴からは、江戸時代の遺物が出土した。17世紀前半、18世紀中頃、18世紀末から19世紀初め、幕末から明治初めの各時期のものがある。種類と内容は以下のとおりである。

肥前陶器（絵唐津・三島鉢・京焼風陶器）・肥前磁器（色絵皿・くらわんか手・コンニャク文の椀・広東椀）、京・信楽系陶器（赤楽椀・染付・色絵椀・皿・灯明皿・摺鉢・甕）、瀬戸・美濃系陶磁器（椀・鉢）、丹波陶器（甕・摺鉢）、堺・明石系陶器（摺鉢）、中国磁器（青花の椀・皿）、土師質土器（皿・蓋・焼塩壺・胞衣壺・ほうらく・灰器）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・棧瓦・鬼瓦）、土製品（人形・玩具・泥めんこ）、銭貨（寛永通寶）。焼けた壁土、炭化したおにぎり、ベトナム陶器、イギリス陶器、輸入ガラス（ボトル類）。

#### 調査の成果

『寛永十四年洛中絵図』（1637年成立）をみると、この第1調査区付近には「ちくさ少将殿」、南に「そのさいしょうどの園宰相殿」の書き込みがある（図3）。「ちくさ少将殿」には間口寸法「十四間半」の記入がある。これは約30mに相当し、溝7から溝72までの距離に等しいため、第1調査区はこの場所に該当するとみてよいだろう。ただし、「ちくさ少将殿」はその後の絵図にはみられず、南にあった「園」家が付近を占める。

調査所見から考えると、この屋敷は溝7・溝72にはさまれた範囲を占め、西側の間口から通路Cを経て内部を行き来する。通路Cの両側には東西棟が並び、その東端に井戸が掘られる。南東側は菜園などに利用され（集石土壌から推定）、北東隅は焼け瓦の廃棄場、南側も土取穴跡の窪地をごみ捨て場に利用していたことが想定できる。遺構の所属時期は、17世紀中頃以降から18・19世紀の遺物が、ごみ捨て土壌・瓦溜の土壌・井戸・溝などから出土しているため、寛永頃には成立し、建物はあまり移動することなく同じ位置で幕末まで存続したと推定できる。このように、実際の調査で公家屋敷の具体的な配置が判明した意義は大きく、今後の未調査部分の調査に期待がもてる。

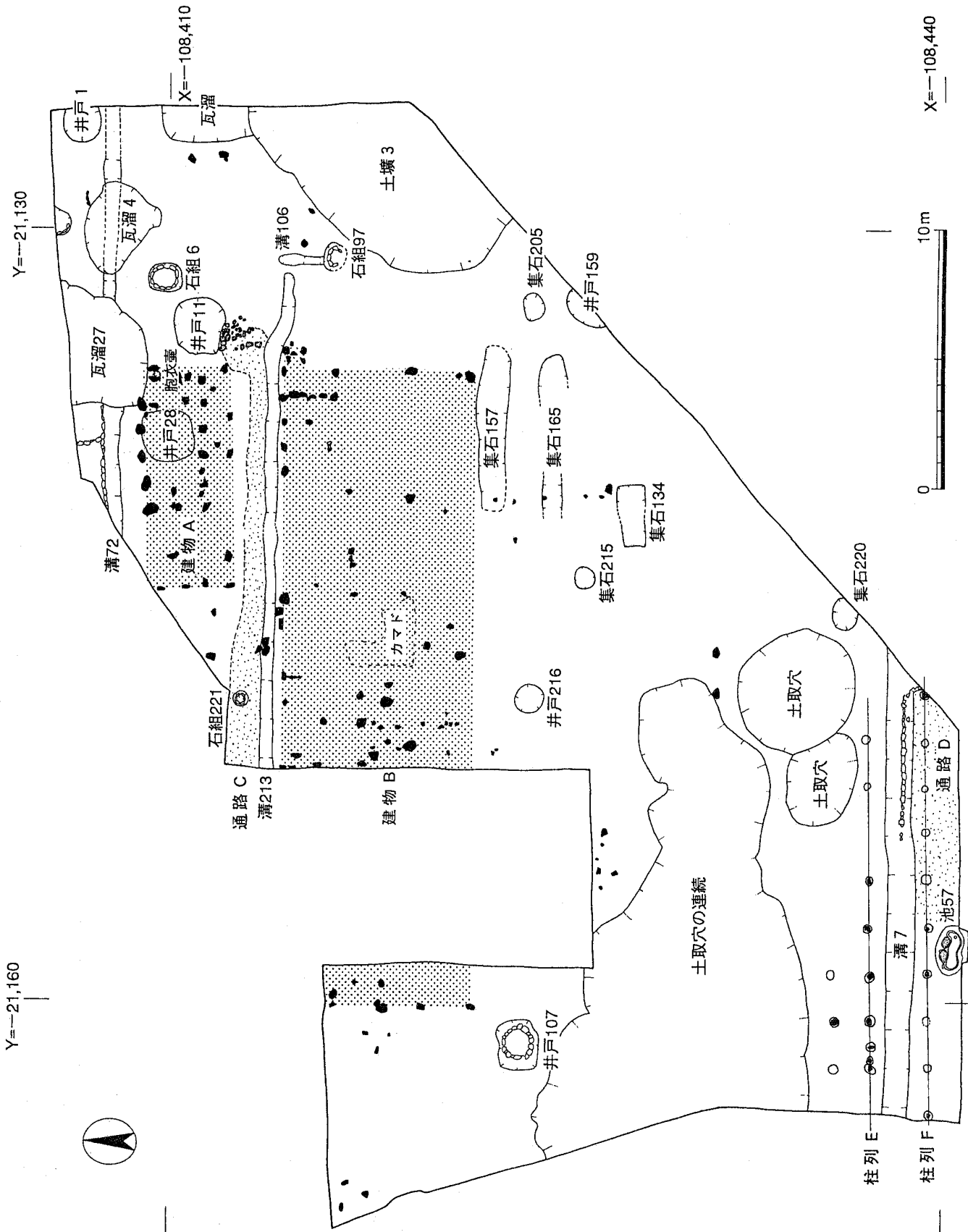


図1 第1調査区の遺構配置図 (1 : 200)

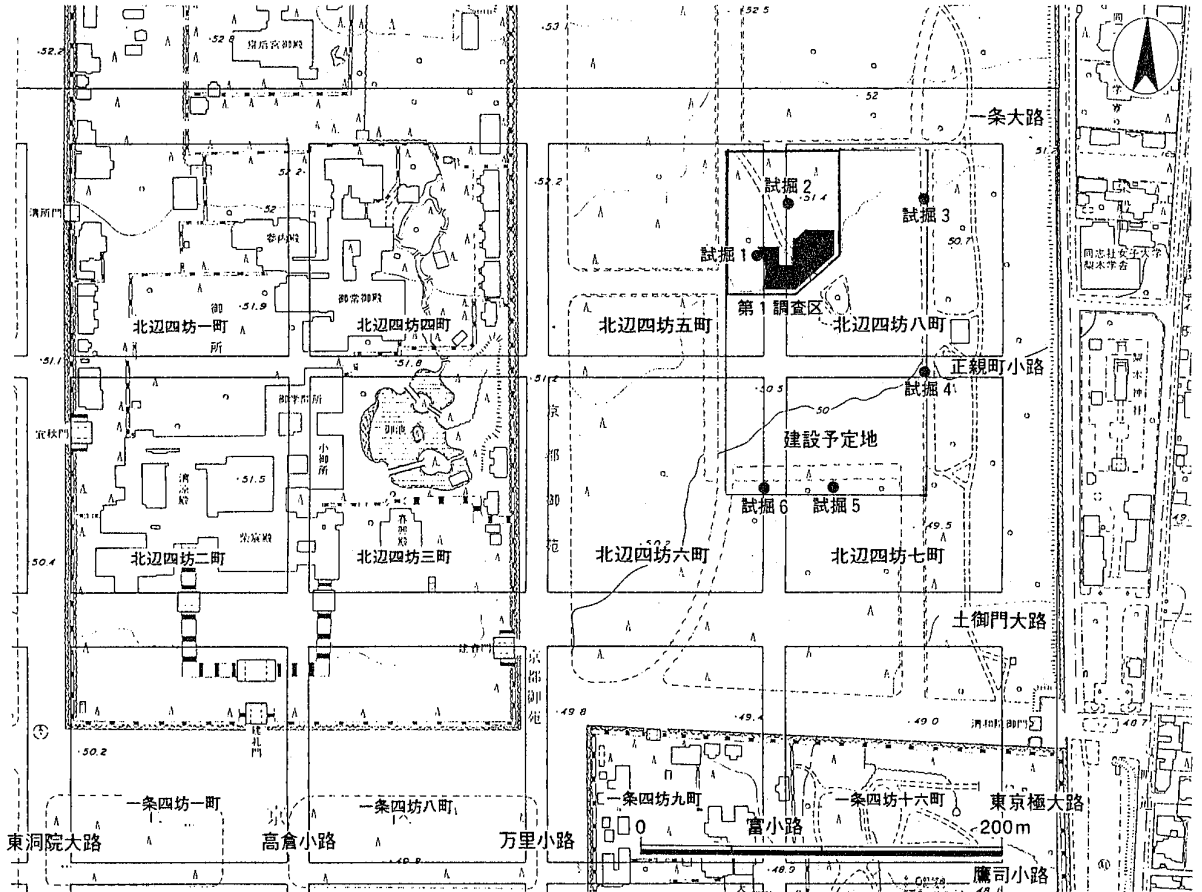


図2 平安京の条坊と調査地

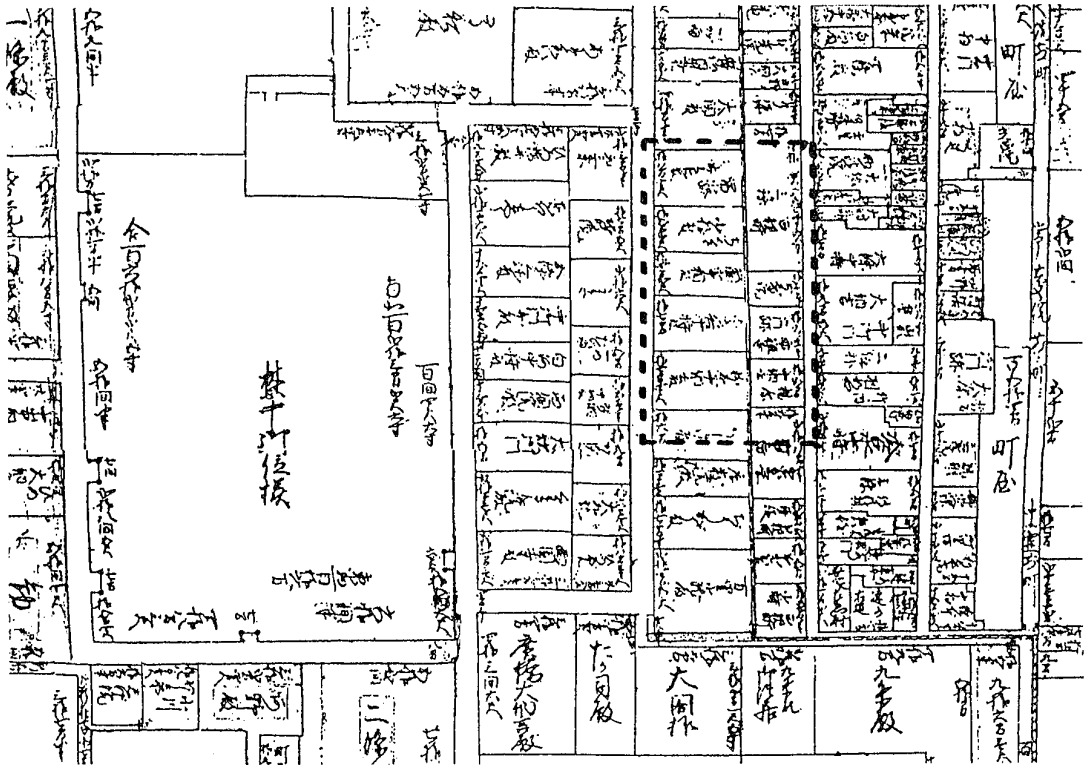


図3 『寛永十四年洛中絵図』での調査地付近 (点線内が建設予定地)

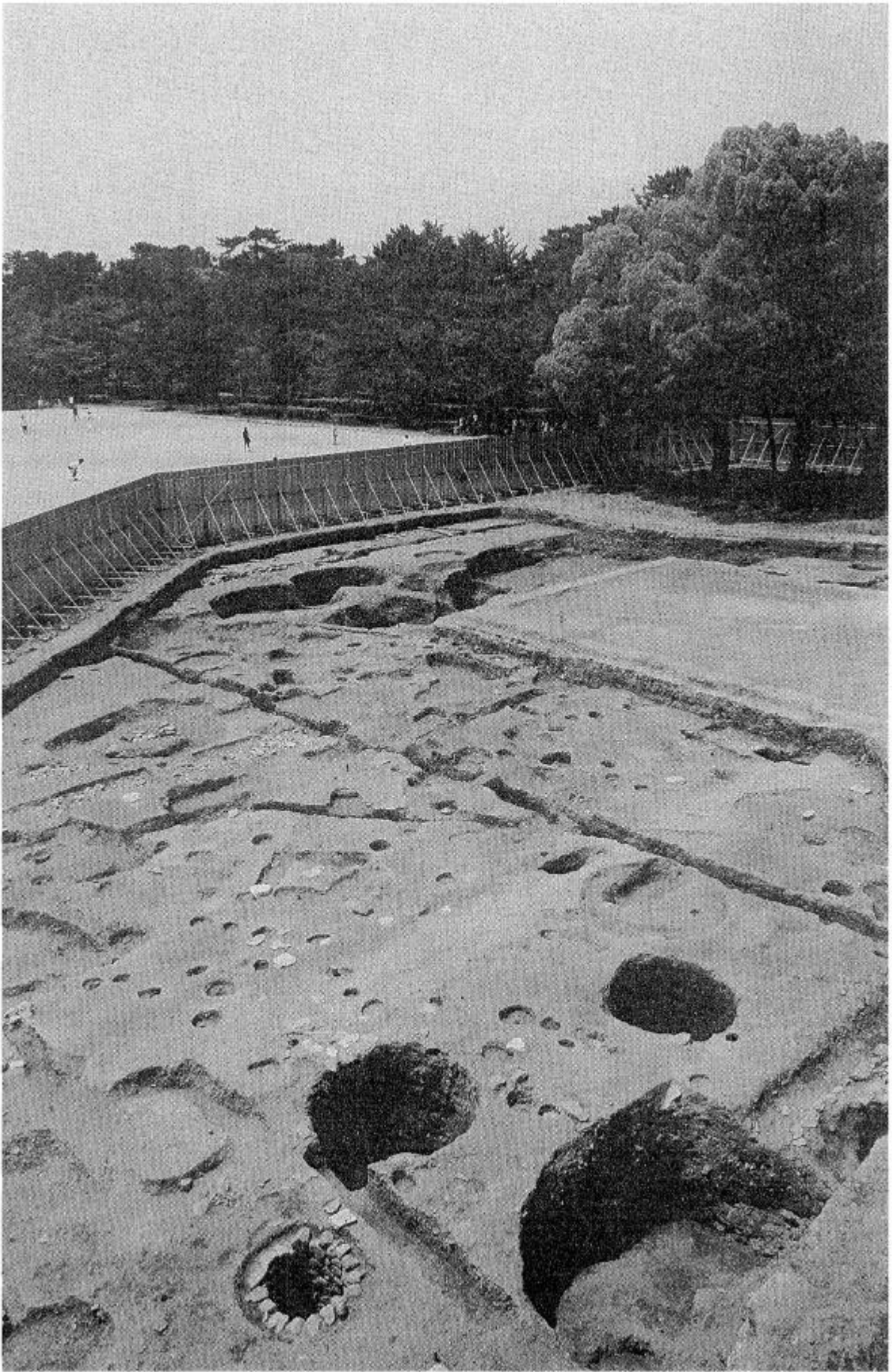


写真1 第1調査区の全景（北東から）

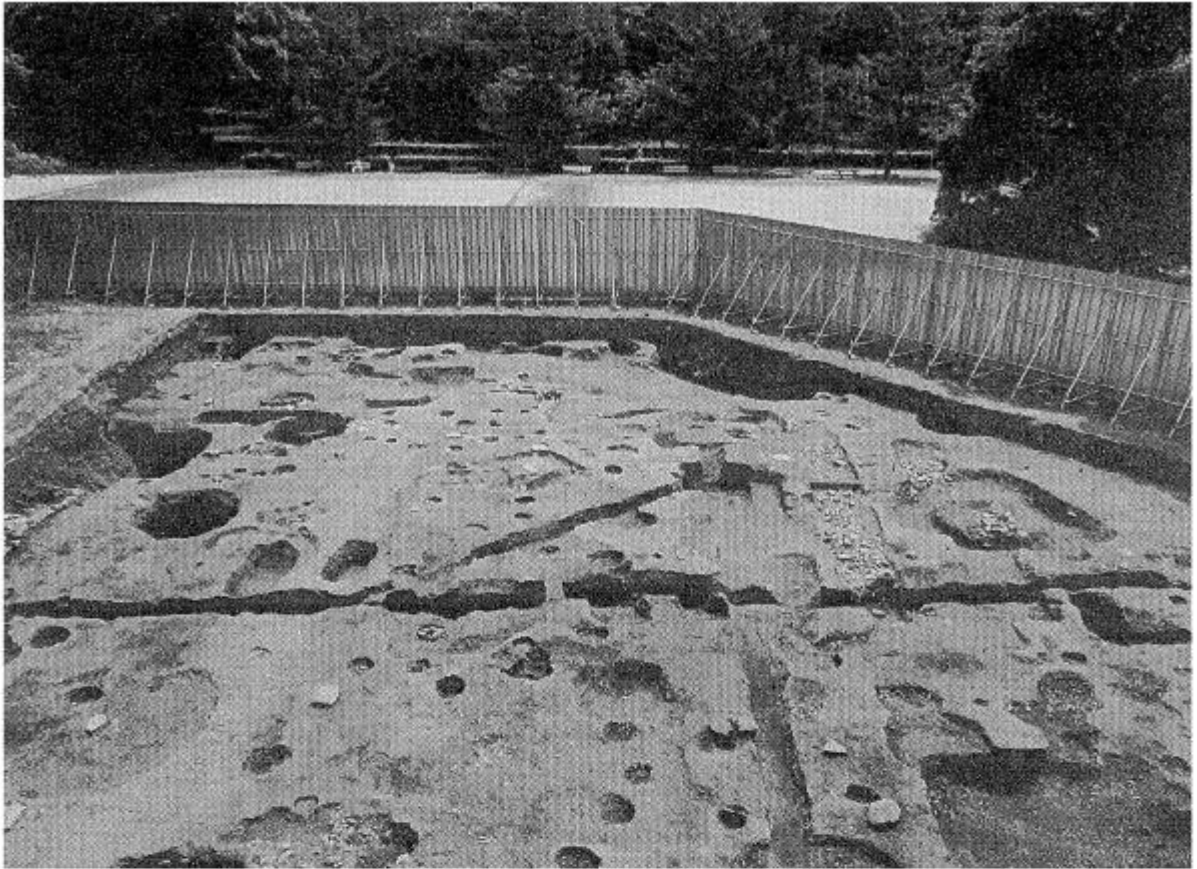


写真2 第1調査区の東半（西から）

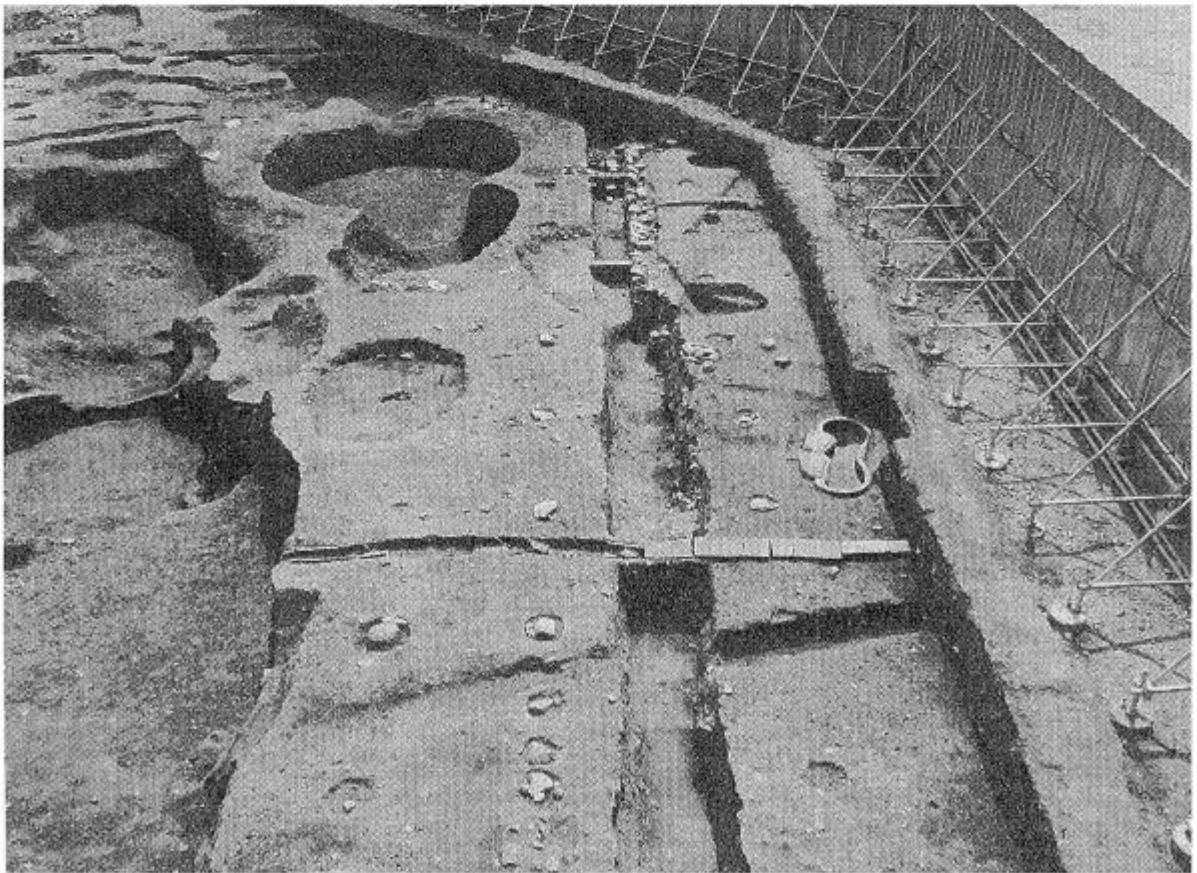


写真3 第1調査区西半の南端部分（西から）